

第2回

# 2007 ため池シンポジウム in あいち



平成 19 (2007) 年

9/15 土

13:00 ~ 17:15

9/16 日

9:15 ~ 17:00

日本福祉大学美浜キャンパス  
12号館・文化ホール

<http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/~kuraji/tameike/>

主催： 第2回ため池シンポジウム実行委員会

(ため池の自然研究会、日本福祉大学知多半島総合研究所、日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト「青の革命と水のガバナンス」ほか)

後援： 農林水産省東海農政局、環境省中部地方環境事務所、愛知県、美浜町、半田市、東浦町、阿久比町、常滑市、武豊町、南知多町、東海市、大府市、知多市、名古屋市、瀬戸市、犬山市、尾張旭市、長久手町、日進市、岡崎市、刈谷市、豊田市、安城市、田原市、愛知県教育委員会、美浜町教育委員会、半田市教育委員会、東浦町教育委員会、阿久比町教育委員会、常滑市教育委員会、武豊町教育委員会、南知多町教育委員会、東海市教育委員会、大府市教育委員会、知多市教育委員会、長久手町教育委員会、日進市教育委員会、岡崎市教育委員会、刈谷市教育委員会、豊田市教育委員会、安城市教育委員会

# 第2回 ため池シンポジウム in あいち

## 目 次

- 2 開会挨拶 第2回ため池シンポジウム in あいち 実行委員会 会長 浜島 繁隆  
歓迎の辞 愛知県 知多郡 美浜町長 山下治夫
- 3 プログラム 1日目 基調講演 行政の取り組み紹介 パネルディスカッション
- 4 2日目 フィールド学習会 ため池の活動紹介 分科会 全体会
- 5 会場案内
- 6 基調講演  
『多様な生き物を育ててきたため池は今』 浜島 繁隆  
『童話「ごんぎつね」と尾張のため池』 青木 美智男
- 1 3 行政の取り組み紹介 「愛知県」「名古屋市」
- 1 4 パネルディスカッション
- 1 6 フィールド学習会  
Aコース 「里山景観の中のため池」  
Bコース 「知多半島のため池・自然のいま」  
Cコース 「カワウと南吉とため池と」  
Dコース 「知多半島・水とため池の来し方」  
ミニコース(フィールド学習会番外編) 「足廻間池の自然と動物」
- 3 1 ため池の活動紹介
- 3 6 分科会  
第1分科会 「水をめぐる歴史と文化」  
第2分科会 「ため池の価値と地域住民の役割」  
第3分科会 「環境教育」  
第4分科会 「生き物の多様性」
- 4 7 実行委員会委員名簿



## 開 会 挨拶

第2回ため池シンポジウム in あいち  
実行委員会 会長

浜 島 繁 隆

### 第2回 ため池シンポジウム開催にあたり

第1回のため池シンポジウムは姫路市の兵庫県立大で行われました。ため池を単なる水利施設ではなく、防災や環境・文化の視点から見直し、地域の宝であるとの観点からため池のもつ多様な側面について議論が深められました。

今回は第2回のシンポジウムとして、ため池のもつ文化・歴史、自然環境、地域住民の役割など多方面から議論を深めたいと考えています。

愛知県では昨年度、「ため池保全構想～未来に伝えよう地域のたから～」を策定し、ため池の保全に向けて本格的な取り組みが始まったところで、このシンポジウム開催は好機であると思います。県のため池保全構想には、ため池はかけがえの無い地域資源と位置づけ、農業用水、歴史・文化財、自然環境の保全、など七つの機能を挙げています。

このシンポジウムではこれらの機能について、パネルディスカッションと二日目に予定している、現地でのフィールド学習会、分科会で、現地での学習を踏まえて具体的な議論を深めて下さることを期待しています。参加者の皆さんが多くの成果をそれぞれの地域に持ち帰りこれからの活動に活用して下さいを願っています。



## 歓 迎 の 辞

愛知県 知多郡 美浜町長

山 下 治 夫

1957年生まれ。名城大学薬学部薬学科卒、(医)瑞心会渡辺病院、(社福)瑞祥、美浜町議会議員を経て、2007年4月より現職。趣味はテニス・ドライブ・庭いじり。

美浜町へようこそいらっしゃいました。本町は知多半島の南に位置する温暖で風光明媚な町です。本町で開催される第2回ため池シンポジウム in あいち2007が、実りあるものとなりますことを期待いたします。

11:30— 受付

13:00—13:05 開会 (会場 12号館文化ホール)

開会の挨拶 第2回ため池シンポジウム in あいち 実行委員会 会長 浜島 繁隆  
歓迎の辞 愛知県 知多郡 美浜町長 山下 治夫

13:05—14:25 基調講演 (会場 12号館文化ホール)

13:05—13:45 『多様な生き物を育んできたため池は今』  
浜島 繁隆 (ため池の自然研究会 会長)

13:45—14:25 『童話「ごんぎつね」と尾張のため池』  
青木 美智男 (日本福祉大学知多半島総合研究所 顧問)

14:25—15:05 行政の取り組み紹介 (会場 12号館文化ホール)

14:25—14:45 『愛知県の取り組み』  
近藤 文男 (愛知県 農林水産部 農林基盤担当 農地計画課)

14:45—15:05 『名古屋市の取り組み』  
若山 秀夫 (名古屋市 緑政土木局 河川部 河川計画課)

15:05—15:15 休憩

15:15—17:15 パネルディスカッション (会場 12号館文化ホール)

コーディネータ: 蔵治光一郎 (東京大学愛知演習林講師)

パネリスト: 浜島 繁隆 (ため池の自然研究会会長)  
青木美智男 (日本福祉大学知多半島総合研究所顧問)  
近藤 文男 (愛知県農林水産部農林基盤担当農地計画課)  
若山 秀夫 (名古屋市緑政土木局河川部河川計画課)  
河合 克己 (半田市文化財専門委員会委員長)  
大沼 淳一 (元愛知県環境調査センター)  
土山 ふみ (名古屋市環境科学研究所)  
矢 部 隆 (愛知学泉大学)

17:30—19:30 交流会 (会場 12号館1階生協)

**8:30- 受付**

**9:15-12:30 フィールド学習会**

総合コーディネータ：高部淑子（日本福祉大学知多半島総合研究所）

- ・ **Aコース「里山景観の中のため池」**（自然系・半島南部）  
コーディネータ：大内秀之（NPO カエルの分校代表）
- ・ **Bコース「知多半島のため池・自然のいま」**（自然系・半島北部）  
コーディネータ：富田啓介（名古屋大学大学院環境学研究科）
- ・ **Cコース「カワウと南吉とため池と」**（人文系・半島南部）  
コーディネータ：河合克己（半田市文化財専門委員会委員長）
- ・ **Dコース「知多半島・水とため池の来し方」**（人文系・半島北部）  
コーディネータ：曲田浩和（日本福祉大学）
- ・ **ミニコース（フィールド学習会番外編）「足廻間池の自然と動物」**  
コーディネータ：矢部隆（愛知学泉大学）

**13:30-14:30 ため池の活動紹介**（会場 12号館3階 1232a・b・1233 教室）

**14:30-16:30 分科会**

- ・ **第1分科会「水をめぐる歴史と文化」**（会場 12号館3階 1231 教室）  
コーディネータ：河合克己（半田市文化財専門委員会委員長）・曲田浩和（日本福祉大学）  
話題提供者：河合克己・曲田浩和
- ・ **第2分科会「ため池の価値と地域住民の役割」**（会場 12号館5階 1251 教室）  
コーディネータ：大沼淳一（元愛知県環境調査センター）・西村一彦（日本福祉大学）  
話題提供者：西村一彦・木村泰三（矢梨新池クラブメンバー・美浜町教育長）  
・神谷明彦（東浦町議）・大内秀之（NPO カエルの分校～代理解説・大沼淳一）  
・米津良純（兵庫県東播磨県民局）
- ・ **第3分科会「環境教育」**（会場 12号館4階 1241 教室）  
コーディネータ：土山ふみ（名古屋市環境科学研究所）・大内秀之（NPO カエルの分校）  
話題提供者：日比伸子（榎原市昆虫館）・稲山雅一（日進市立西小学校）  
・松尾由美（美浜町立河和南部小学校）・大内秀之
- ・ **第4分科会「生き物の多様性」**（会場 12号館4階 1242 教室）  
コーディネータ：矢部隆（愛知学泉大学）  
話題提供者：小鹿亨（安城市立今池小学校）・飯尾俊介（福花園種苗 KK 参与）・矢部隆

**16:30-17:00 全体会**（会場 12号館3階 1231 教室）

各分科会コーディネータからの報告・総括

**17:00 閉会**

# 日本福祉大学 美浜キャンパス案内図 (キャンパス内全館禁煙)

足廻間池  
 【9/16: キャンパス内ため池見学】  
 (参加自由: 無料)

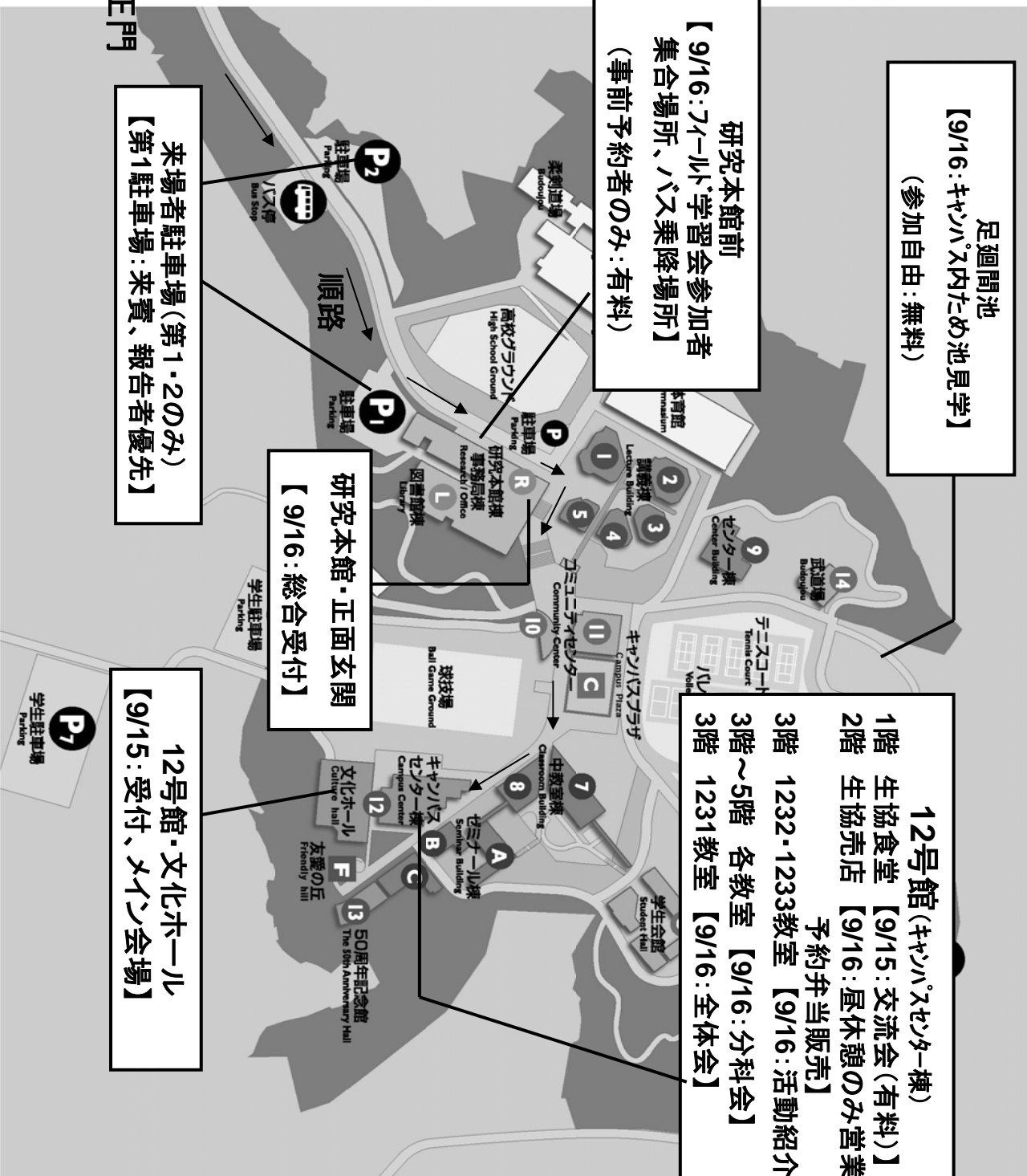
研究本館前  
 【9/16: フォーバル学習会参加者  
 集合場所、バス乗降場所】  
 (事前予約者のみ: 有料)

12号館(キャンパスセンター棟)  
 1階 生協食堂 【9/15: 交流会(有料)】  
 2階 生協売店 【9/16: 昼休憩のみ営業、  
 予約弁当販売】  
 3階 1232・1233教室 【9/16: 活動紹介】  
 3階~5階 各教室 【9/16: 分科会】  
 3階 1231教室 【9/16: 全体会】

研究本館・正面玄関  
 【9/16: 総合受付】

来場者駐車場(第1・2のみ)  
 【第1駐車場: 来賓、報告者優先】

12号館・文化ホール  
 【9/15: 受付、メイン会場】



- ① 講義棟1号館  
Lecture 1st building
- ② 講義棟2号館  
Lecture 2nd building
- ③ 講義棟3号館  
Lecture 3rd building
- ④ 講義棟4号館  
Lecture 4th building
- ⑤ 講義棟5号館  
Lecture 5th building
- ⑨ 9号館(センター棟)  
9th Building (Center Building)
- R 研究本館棟・事務局棟  
Research Building / Office Building
- L 図書館棟  
Library
- ⑩ 10号館(コミュニティーセンター)  
10th Building (Community Center)
- ⑪ 11号館(コミュニティーセンター)  
11th Building (Community Center)
- ⑭ 14号館(武道場)  
14th Building (Budojoju)
- C キャンパスプラザ  
Campus Plaza
- S 学生会館  
Student Hall
- ⑦ 7号館(中教室棟)  
7th Building (Classroom)
- ⑧ 8号館(中教室棟)  
8th Building (Classroom)
- A ゼミナール棟A館  
Seminar A Building
- B ゼミナール棟B館  
Seminar B Building
- C ゼミナール棟C館  
Seminar C Building
- ⑫ 12号館(キャンパスセンター棟)  
12th Building (Campus Center)
- ⑬ 12号館(文化ホール)  
12th Building (Cultur hall)
- ⑬ 13号館(50周年記念館)  
13th Building (The 50th Anniversary Hall)
- F 友愛の丘  
Friendly Hill
- H 高校棟・柔剣道場・体育館  
High School Building / Budojoju / Gymnasium

至正門

## 基調講演

9月15日(土) 13:05～14:25

会場：12号館 文化ホール



知多半島のため池① 申田下池（阿久比町福住地区） 2001.12.9 撮影

周辺が住宅地や菜園になっているため池。宅地化の進む知多半島では、このような景観を持つため池も数多く見られる。池に飛来する鳥によるフン害といった負の側面と、残された自然景観という正の側面との両面を持っている。

## 講演者紹介



### 浜島繁隆（はまじま・しげたか）

1933年生まれ。ため池の自然研究会会長。

主な著書：『池沼植物の生態と観察』（ニューサイエンス社）、『知多半島の植物誌』（トンボ出版）、『ため池の自然学入門』、分担執筆（合同出版）、『ため池の自然・生き物たちと風景』、編著（信山社サイテック）、『ため池と水田の生き物図鑑・植物編』、共著（トンボ出版）

水草の分布、生態に興味をもち、40年近く調査、研究をしている。近年の急激な水草の減少に危機感を抱いている。1981年ため池をフィールドとする研究仲間と「ため池の自然研究会」を結成し、26年を迎える。現在もため池の生き物や水環境に関心をもち会員の研究、調査に参加している。



### 青木美智男（あおき・みちお）

1936年福島県東白川郡棚倉町生まれ。東北大学大学院文学研究科国史学専攻修士課程終了。専門の研究は日本近世文化史。

日本福祉大学経済学部教授、専修大学文学部教授を経て現在日本福祉大学知多半島総合研究所顧問、愛知県史編さん委員会近世史部会長。

主な著書：『一茶の時代』（校倉書房、1998年）、『近世尾張藩の海村と海運』（校倉書房、1997年）、『大系日本の歴史⑩ 近代の予兆』（小学館、1989年）、『深読み浮世風呂』（小学館、2003年）、『近世非領国地域の民衆運動と郡中議定』（ゆまに書房、2004年）



# 多様な生き物を育んできたため池は今

浜島 繁隆

わが国の農業は水稻を中心に発展してきたが、弥生中期には稲作用の水路や畦を設けて水を引く人工灌漑が始められたが、水田の開発が丘陵や山間にまで及ぶにつれ灌漑用の水確保の必要性からため池の築造が行われるようになった。土木史上、ため池の築造は7世紀以降とされているが、既に5～6世紀には灌漑農業が定着し始めていたと考えられている。ため池にはこのような古い歴史のある池もみられるが、現在、われわれが身近に見る多くの池は近世以降のものが殆どである。

名古屋市東部丘陵から知多半島にかけて点在するため池について、築造の年代は多くが不明であるが、記録に残る比較的大きな池、約100箇所についてみると、17～18世紀の池が72%を占めていた（浜島、1981）。

ため池は築造当初は全くの人工の水溜りで生き物の姿は見られない。しかし、ため池を造ることで、池の堤、水田と畦、土手と水路、さらに池を取り込む里山など多様な環境が創出され、これらが250～300年の長い年月を経過することで、多様な生き物が生活する一つの生態系が形成された。これが私たちの身近に感じる自然であり、故郷の風景であった。しかし、最近、この自然豊かな故郷で、今まで見られたドジョウやメダカがいなくなったり、池に浮くヒツジグサやヒメコウホネの浮葉や花が見られないなど自然界の変化を感じるようになった。放置された里山は荒廃し、竹林は広がり、ため池の水質は汚濁され、水田の乾田化や耕地整理による土手の改修、水路のU字溝替えなど、今まで見られた豊かな生き物たちの生活する環境が次々と改変され、生態系に大きな変化を与えた結果生じた現象がある。どのような変化が生き物にどんな影響を与えているのか、科学的な調査研究が早急に求められている。しかし、田端（2000）が指摘するように、「長い間、人間が手を加えた自然は、研究対象としてよくないとされてきたので、里山にすむ生き物の研究が、ほとんど行われてこなかった」。このような研究者の姿勢から身近な自然を理解する手立てが得られないまま、今や対策を模索する時代にあるのではないかと思われる。

ため池を取りまく自然の変化を知るには、池と水田、里山を含めてそこに生きる多様な生き物についてふれなくてはならないが、ここでは、私が調査している植物（水草）を中心にすることにする。

環境省（2000）の「日本の絶滅のおそれのある野生生物」＜略してRDB＞に掲載されている絶滅危惧種で、ため池に生育する水草は39種がリストアップされている。ため池を主な生育地とする水草は100種であり、約40%が絶滅の危機にあることになる。このような深刻な状況に水草が追いやられていることはどれだけ周知されているであろうか…。次に幾つかの地域の報告からその実態を見る。

- 東播磨地方（角野、2000）：20年間でヒシの生育する池が25%減少、普通種のクロモが65%の池から消滅、ジュンサイは80%、ヒツジグサは69%の池からすがたを消した。
- 明石市（角野、1994）：105箇所の池で調査した結果、水草が一種も確認されない池が8%、ヨシ、ヒメガマのみの池が41%で水草の著しい減少がみられた。消滅の主な原因は、極度

の富栄養化、大規模改修による岸辺の形態と水深の変化が指摘されている。

○ 佐賀県（岩村、1999）：県内のため池に見られる水草75種、うち20種（27%）が絶滅危惧種に、その原因は池の改修が最大の原因、次に水質の汚濁と埋め立てが挙げられている。

○ 香川県の希少動植物保護に向けての取り組み（白井・木村、2003）で絶滅の危機にある種はタガメ、メダカ、ドジョウ、トノサマガエル、キキョウ、オミナエシなど身近な種であることが明らかになった。その絶滅の危機をもたらした要因は森林開発、ため池や河川の改変などの開発行為に加え、ため池や森林の管理放棄などを挙げ、人為のもとで維持されてきた二次的自然の喪失により種が絶滅の危機にあると指摘している。

○ 名古屋市東部（浜島、1995）：1964年のため池調査から30年後の水草相の変化をみた。やや増加したのはヒシ、クロモのみで、タチモ、ヒメコウホネ、ガガブタは80%減少、トリゲモ、ヒツジグサは絶滅。減少の原因は地域開発による埋め立てや大規模の改修、水質の富栄養化が考えられる。

その他のため池の水草の動態を調査した資料から、名古屋周辺のため池の水草の絶滅・減少は次の要因が考えられた。

- ① 水質の悪化（過度の富栄養化）：生活雑排水、畜産排水、農耕地からの肥料流入、農薬（除草剤）などの流入、都会周辺の池では釣りの餌の投入
- ② 大規模改修：堤の改修による長期の干上がり、岸辺のコンクリート張り、岸辺の水深の増大、池底の泥撤去
- ③ 地下水の枯渇：池周辺の開発による地形変化などともなう地下水脈の変化と湧き水の枯渇、それによる水循環の停滞
- ④ 外国産水草、園芸種の移入：コカナダモ、ホテイアオイ、フサジュンサイ、ナガバオモダカ、キショウブ、スイレンなど繁殖力の強い種による在来種の駆逐
- ⑤ 用水の開通で、用水からの導水によるため池の貯水池化：水位変動がなく常に満水状態で岸辺の水深は常に大きく、岸辺を生育域とする水草の生育域を奪う
- ⑥ 養魚池化：多量の餌の投入で富栄養化が進む
- ⑦ 住民の池への思いやり欠如：ゴミの投入、岸辺に廃品を投棄

水草減少・絶滅の要因として挙げられているため池の大規模改修について、知多半島の美浜町では、受益面積1ha以上の93箇所の池で、未改修は22%で、多くの池は改修が終っている。改修は老朽ため池や防災上からの理由である。

改修が多くの生き物を絶滅させる原因になるとは限らず、その工法や仕様の工夫で豊かな自然を取り戻すことが出来たのである。特に池の岸辺のあり方は水草や水生動物にとり重要である。それは狭い空間であるが、陸から水中へ環境条件が連続的に変化するいわゆるエコトーン（移行帯、生態学用語）で、多様な生き物の生息環境や多様な植生を発達させる場所である。改修後のため池にはこのような配慮を欠くものが多く見られる。

他に自然観察の場としてのため池や居住環境としてのため池についても考えたい。

<引用・参考文献>

1. 浜島繁隆（1981）「東海地方のため池にみられる水草の分布と由来」、地域社会6（1）  
16-26
2. 角野康郎（1994）「兵庫県におけるため池の水生植物の現況・明石市」、水草研究会会報5  
3、1-7
3. 浜島繁隆（1995）「愛知県のため池の植生とその変化及び現状・保護」、愛知県の植物相、  
247-271、愛知県
4. 岩村政浩（1999）「佐賀県で絶滅の危惧される水生植物」、佐賀自然史研究、5、33-4  
4
5. 角野康郎（2000）「ため池における生物多様性の保全」、農山漁村と生物多様性、  
206-222、家の光協会



## 童話「ごんぎつね」と尾張のため池

青木 美智男

愛知県知多半島が生んだ作家といえば、すぐ思い浮かべるのが新美南吉でしょう。小学校の国語の時間に、南吉が書いた「ごんぎつね」や「てぶくろを買いに」など、子狐を主人公にした童話を読み、ちょっとした感動を覚えたことがあると思います。

南吉は、1913（大正2）年に知多半島の半田町西折戸（現半田市）に生まれ、本名を正八といいました。南吉は県立半田中学に入学後文学に目覚め童話を書き出しました。1932（昭和7）年、東京外国語学校に入ると童話作家として活動を開始し、この年鈴木三重吉主宰の児童文芸雑誌『赤い鳥』1月号に「ごんぎつね」を発表して注目をあびだしたのです。19歳の時でした。

では、南吉は主人公のいたずら子狐に、なぜ「ごんぎつね」という名をつけたのでしょうか。この童話から分かるのは、中山という古城に近い山中にある、「しだのいっばいしげった森の中に、あなをほってすんでいました」というくらいです。そこでいろいろな説がありますが、もっとも説得力のあるのが古城主の子孫中山文夫さんの説です。中山さんは南吉の幼馴染でした。あることから南吉は、しばしば中山邸を訪れるようになり、そこで文夫さんのお母さんから地域に伝わる民話を聞きました。狐や狸に関する物語がすごく多かったそうです。中でも大興寺村に伝わる「ごんぎつね」と題する物語が好きで、お母さんから何度も聞いたそうです。中山さんはそれが「ごんぎつね」の原型だといわれます。

では、大興寺の「ごんぎつね」はどんな物語だったのでしょうか。半島の中央部に近い村の東端に「鐘つき池」という溜池があり、その溜池は、「周囲を松の丘がとりかこみ、その池の水は山清水をたたえて、とても深く澄んでおりました。池の底には水葦がはっきり見え、ときには紫色に見えたりして、恐ろしいぐらいでした。この池に夕風がふきはじめると、池の底から『ごーんごーん』と、鐘の音が聞えてくるのです」（中山文夫「私の『ごんぎつね』」『新美吉研究』1、『新美南吉全集』（1）付録、1973年）と、周囲の林を吹き抜けて水面に当たる反響音を、村の人々は池を取り巻く森に棲む狐が打つ鐘の音だといって恐れ、この狐を「ごんぎつね」と呼ぶようになったというのです。

つまり名作「ごんぎつね」は、溜池が生んだ民話をベースに書かれた童話であるということになります。ではなぜ、「溜池」の周囲に狐が棲みついたのでしょうか。それは人間が立ち入らない「しだのいっばいしげった森の中」だったからです。

知多半島は、御存知のように伊勢湾と三河湾に突き出た小さな半島です。長さ約50km、幅が最大で14kmしかありません。そのため保水力が小さく、常に水に悩まされてきました。それゆえ、半島に生きる人々は、古代以来、農業を営みつつ、海（漁業・塩業）と土（窯業）に大きく依存して生計を立ててきました。とりわけ平安時代末期から鎌倉・室町時代には、全国有数の窯業地帯となり、常滑焼と呼ばれる良質の陶器を大量に生産し続け、各地へ運ばれてきました。また、半島沿岸では塩の生産も盛んに行われてきました。

この二つの産業に欠かせないのが燃料です。知多半島の山々は、この二つの産業を支えるために、

繰り返して伐採され続けました。この結果、次第に山の植相に変化が見られるようになり、近世初期には、山のほとんどが「松の山」＝松林となってしまいました。

江戸時代に入ると、各地の窯業も発展し、さらに貯蔵や移動用器として木材の桶や樽が利用されるようになると常滑焼の需要が減りだし、現在の常滑市周辺に限定されるようになりました。また塩の生産も三河湾側の一部（東浦町生路）に限られるようになりました。そして近世初期の尾張藩は、国力の増大のため知多半島での新田開発を推進し米穀生産の増大に努めるようになったのです。

尾張藩は、尾張西部は木曾川を灌漑用水に活用し、東部丘陵地域から知多半島にかけては、溜池灌漑によって水を確保しようとしたのでした。そしてその双方を徳川家康の遺産の大部分をつぎ込み断行したのです。こうして知多半島と尾張東部丘陵地帯には、入鹿池をはじめ山間に無数の溜池が造成され、開発された新田の灌漑用水に用いられました。

造成場所は、山間の水源地でしたから知多の小河川の水源のほとんどが溜池になりました。尾張藩はこの灌漑用水専用の溜池を「雨池」と呼んで区別しました。しかし背後にある山々は松山ばかりでした。尾張藩はその山々を「御林」＝藩有林としても活用し、しばしば伐採しました。この結果どんなことが起こったのでしょうか。近世中期以降になると山崩れ、洪水、「雨池」の崩壊が連年続くようになり、藩の財政に大きな打撃を与えることとなりました。

そこで尾張藩は、政策を大きく転換することになります。とくに「雨池」への土砂の流出を防ぐため、背後に「砂留林」＝砂防林、「砂留山」を設け、そこに立ち入らせない、つまり伐採を許さない方法で「雨池」の保全に乗り出すことになったのです。知多半島の人々は、雨池の周囲は「サボヤマ」（砂防山）だから立ち入ってはならないと強く教えられてきたそうです。「雨池」の周囲はどんな植相に変わるのでしょうか。おそらく「しだのいっぱいおいしげった森」になっていたことでしょうか。この辺に「ごんぎつね」民話誕生の秘密がありそうです。その辺の事情をちょっと詳しくお話してみましよう。

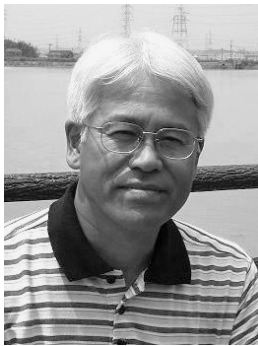


## 行政の取り組み紹介

9月15日(土) 14:25~15:05

会場： 12号館 文化ホール

### 行政の取り組み紹介 愛知県



近藤文男（こんどう・ふみお）

1956年生まれ。愛知県農林水産部農林基盤担当農地計画課課長補佐。  
著書・論文：『知多半島のため池の歴史・現状・多面的機能』、『大規模地震時における農業水利施設の利活用について』

本県では平成19年3月に愛知県ため池保全構想を策定しました。現在、この構想に基づき、ため池を地域のたからとして未来に伝えるべく、行政と地域が連携して保全するための具体的な取り組みを進めています。

### 行政の取り組み紹介 名古屋市



若山秀夫（わかやま・ひでお）

1948年生まれ。名古屋市緑政土木局河川部河川計画課技師。  
著書・論文：『市内河川・ため池等の水質の変遷』、『中川運河の川底が見えたら、堀川・新堀川がきれいになった』ほか。

名古屋市の中心部を流れる「中川運河・堀川・新堀川」の浄化を始め、名古屋市内の河川・ため池の水質浄化手法の確立。

# パネルディスカッション

9月15日(土) 15:15~17:15

会場：12号館 文化ホール

テーマ 「ため池の歴史、文化、価値と未来可能性」

## 趣旨

ため池という言葉を知らない人はいないでしょう。しかし今、ため池に関心を持っている人は、残念ながら昔に比べて極めて少なくなってしまったのではないのでしょうか。

かつて、食糧生産のために、地域になくってはならない存在であったため池は、地域の人たちが総出で維持管理する「みんなの財産」でした。今や、ため池は農業用水確保以外にも、貴重な生き物の生息の場として、環境や歴史、文化の学習の場として、防災設備として、さまざまな価値をもつものになっていますが、そのことは残念ながらあまり知られておらず、気がつくともため池の数は年々減ってきています。

パネルディスカッションでは、基調講演をしていただいた先生、愛知県、名古屋市の取り組みをご説明いただいた方々に加えて、翌日の分科会でコーディネータをつとめられる方々にもパネラーとしてご参加いただき、「歴史、文化」「地域社会」「環境教育」「生き物の多様性」といった多様な視点から、多くの農業者、市民、教育者、行政職員等の方々に、ため池の存在と、その「地域の宝」としての現代的な価値について、もっと関心をもってもらうにはどうすればよいか、そしてその上で、みんなで力をあわせてため池を未来に引き継いでいくためにはどうすればよいか、一緒に考えていきたいと思えます。

## コーディネータ



蔵治光一郎（くらじ・こういちろう）

1965年生まれ。東京大学愛知演習林講師、日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト「青の革命と水のガバナンス」研究グループ長。

著書・論文：『緑のダムー森林・河川・水循環・防災』『森の健康診断ー100円グッズで始める市民と研究者の愉快的森林調査』（いずれも築地書館）

これまで個別に管理されてきた水、川、池、森を、互いのつながりを考慮しながら総合的に管理するための「新しい秩序」を実現するために、理論的、実践的に何ができるか、研究者はどのような役割を果たすべきかを追求しています。

パネリスト： 浜島繁隆 (P.7参照)

青木美智男 (P.7参照)

近藤文男 (P.13参照)

若山秀夫 (P.13参照)



**第1分科会 河合克己(かわい・かつみ)**

1934年生まれ。半田市文化財専門委員会 委員長。

著書・論文：『知多半島歴史読本』(新葉館出版)、「昔話の中のため池—愛知県の場合—」(『知多半島の歴史と現在』14、日本福祉大学知多半島総合研究所)

愛知県内の『雨乞い』について、三河の一部を除いて資料の収集を終わりました。ライフワーク『愛知用水通水前の知多半島のため池灌漑研究』に関連して、『ため池分布の地域性』と『知多のマンボ』について調査、分析中です。



**第2分科会 大沼淳一(おおぬま・じゅんいち)**

1944年生まれ。元愛知県環境調査センター、ため池の自然研究会幹事、NPO法人「みたけ・500万人の木曾川水トラスト」監事。

著書・論文：『ため池と水田の生き物図鑑・動物編』(共著)、『入鹿池の水の華—発生原因と水質管理方法に関する考察—』

入鹿池の赤潮発生原因究明と対策のための調査研究に関わって20年。次々と消滅するため池をひとつでも多く守りたい。ため池・里山生態系として、あるいは、ため池群としての保護保全を視野に入れながら。



**第3分科会 土山ふみ(つちやま・ふみ)**

1948年生まれ。名古屋市環境科学研究所水質部 主任研究員。

著書：『ため池の自然—生き物たちと風景』、『都市の中に生きた水辺を』、『日本の水環境4東海・北陸編』

都市の水域(河川・水路・ため池等)の保全と再生に役立つ科学的知見を得るための調査研究を行っている。水域の総合指標とも呼べる『水の風景』の『保全』に興味を持っている。



**第4分科会 矢部 隆(やべ・たかし)**

1963年生まれ。愛知学泉大学コミュニティ政策学部 教授。

著書：『動物たちの気になる行動(2) 恋愛・コミュニケーション篇』(共著、裳華房)、『育てて、しらべる 日本の生きものずかん6 カメ』(監修、集英社)、『今、絶滅の恐れがある水辺の生き物たち』(共著、山と溪谷社)他

カメが大好きで、現在ではニホンイシガメ、クサガメ、ヤエヤマイシガメなど淡水生カメ類の生態、行動、進化、保全について調査、研究しています。最近では、ミシシippアカミミガメ、カミツキガメ、ワニガメといった外来カメ類への対応に追われています。



## フィールド学習会

9月16日(日) 9:15~12:30



知多半島のため池② 上池田1号池(阿久比町草木地区) 2001.12.2撮影

コンクリート護岸がほとんど行われておらず、水辺がぐるりと土に触れている今時珍しいため池。里地における草地の荒廃・減少が進行している中で、こうしたため池の堰堤や周囲に成立する草地は、貴重な動植物のハビタットとなる。

## フィールド学習会

### 総合コーディネータ



#### 高部淑子（たかべ・としこ）

1963年生まれ。日本福祉大学知多半島総合研究所准教授。  
著書・論文：「情報の伝播と近世社会」『立教大学日本学研究所年報』5(2006年)、日本福祉大学知多半島総合研究所・博物館「酔の里」共編著『中埜家文書にみる酢造りの歴史と文化』（部分執筆、中央公論社、1998年）

古くからのものづくりが発展してきた環伊勢湾地域において、水をめぐる歴史に興味があります。たとえば、上水道や醸造業における水の問題、治水と利水、水運（海運と河川舟運）などが研究テーマとしてあげられます。

### Aコース



#### 大内秀之（おおうち・ひでゆき）

1945年生まれ。NPO『カエルの分校』代表。  
著書・論文：『アテビ平の自然』『豊田の野鳥』

なつかしい生きものが次の世代も絶えないように、耕作放棄された棚田を周囲の山ごとお借りし、生きものの生息地として維持管理しながら、子どもたちの自然体験と学びの場として提供する活動などを行っています。

### Bコース



#### 富田啓介（とみた・けいすけ）

1980年生まれ。名古屋大学環境学研究科 大学院生  
著書・論文：「ため池の減少率を規定する土地利用変化 —愛知県知多半島中部の事例—」（『地理学評論』79巻6号、2006年）、「知多～尾張丘陵におけるシラタマホシクサと地域住民の関わりの変遷」（『愛知県史研究』10巻、2006年）

現在は東海地方の丘陵地に点在する湧水湿地の植生について研究を進めていますが、湧水湿地や植生だけでなく、さまざまな身近な自然環境を多くの人に紹介し、関心をもつきっかけになるような社会教育に携わる仕事を目標としています。

### Cコース

#### 河合克己（かわい・かつみ）

（P. 15 参照）

## Dコース



### 曲田浩和（まがりだ・ひろかず）

1965年生まれ。日本福祉大学経済学部准教授。

著書・論文：「名産品を競う」『番付で読む江戸時代』『伊勢湾周辺地域における木綿流通と知多木綿』『知多半島の歴史と現在』No.13

知多半島のものづくりにかかわる歴史を明らかにし、知多半島のものづくりが他の地域とどのように結びついているかを考えています。

## ミニコース（フィールド学習会番外編）

### 「足廻間池の自然と動物」

#### コーディネータ

矢部 隆（やべ・たかし）

（P. 15 参照）

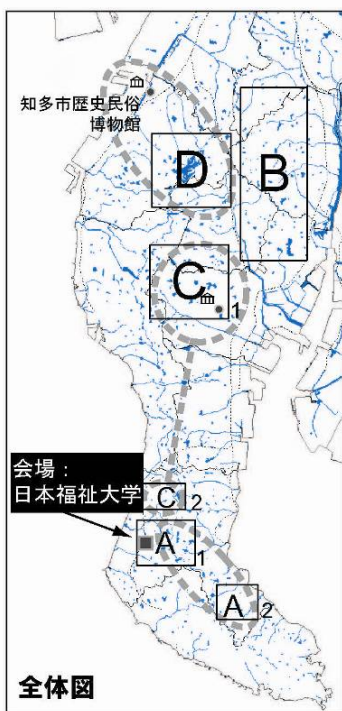
会場となる日本福祉大学のキャンパスにあるため池に水生動物捕獲用のわなを仕掛け、どのような動物が生息しているか調べます。カメ、カエル、魚・・・何が捕れるかな？

フィールド学習会 A～D コースに参加できなかった方はこちらへどうぞ。

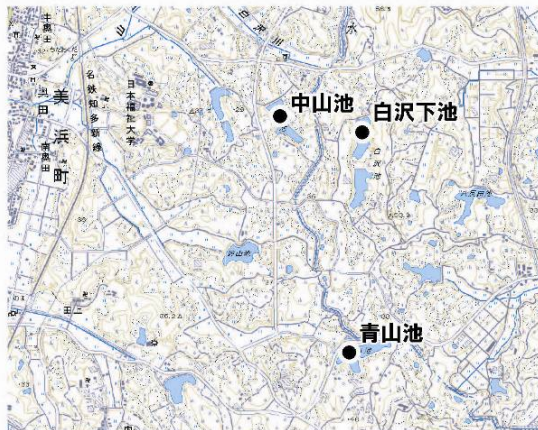
16日は、キャンパス内で、各コースで見学するため池や、尾張・知多のため池に関する写真・絵図などを紹介する予定です。（会場未定）

# フィールド学習会 行き先MAP

このページに掲載の地図は、国土地理院発行1:25000地形図を利用した。



## Aコース：里山景観の中のため池(自然系・南)

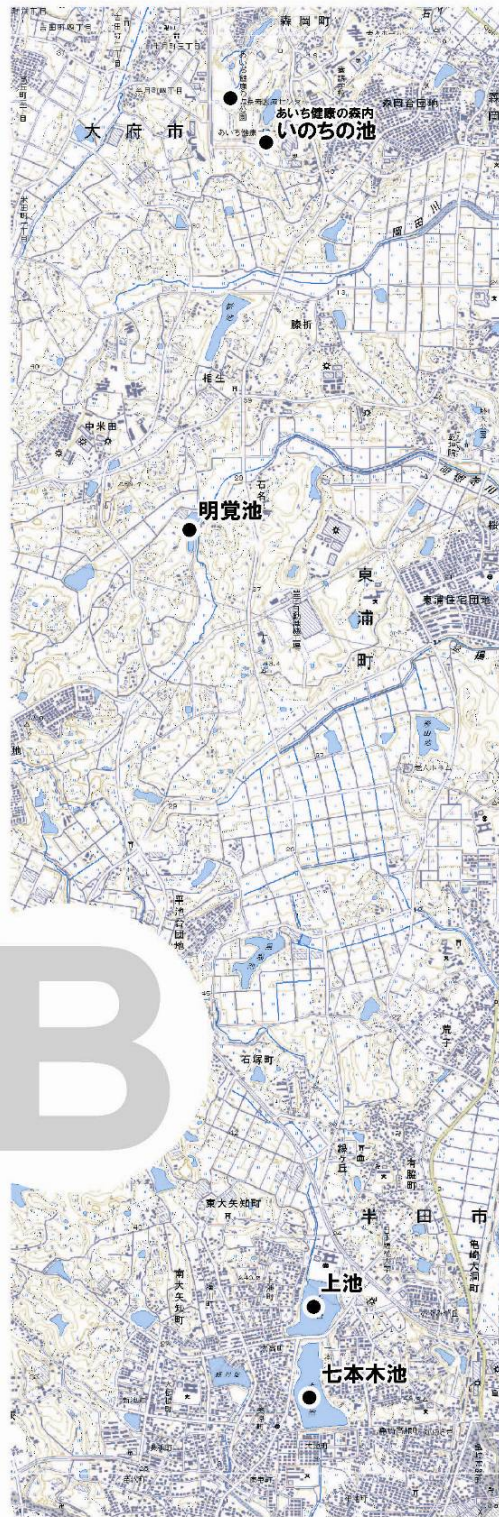


↑ A1

← A2

A

## Bコース：知多半島のため池・自然のいま(自然系・北)





Cコース: カワと南吉とため池と(人文系・南)

C1



C2

C



Dコース: 水とため池の来し方(人文系・北)

\*知多市歴史民俗博物館は地図の範囲外(全体図参照)

D

## Aコース 「里山景観の中のため池」

●コーディネータ：大内秀之（NPO『カエルの分校』代表）

●ルート：美浜キャンパス→矢梨新池→青山池→中山池→白沢下池→美浜キャンパス

ため池の持つ多面的役割を損なうことなく、豊かな生態系や景観を、どのように次の時代へ引き継ぐかを、現地を見ながら、みなさまと話し合いができればと思います。

### ①矢梨新池

南知多らしい美しいため池で、地域のボランティア「しんいけ倶楽部」の方々と、河和南部小学校の児童たちによって、その美しさが保たれています。堤体上からは、三河湾も望めます。地元の方に、維持のための苦労話なども、ご報告いただく予定です。



### ②青山池

昔からあったため池に、愛知用水の水量調整機能を持たせた、大きなため池です。池の片面は道路と接しているものの、水草も豊富で、自然が残されています。愛知用水についても、関係機関の方からお話いただきます。



### ③中山池

堤体の法面に工夫がなされていて、植物も生え、子供が万一池に落ちても這い上がりやすいようになっています。関係機関の方から、その辺の苦労話などもうかがいます。



### ④白沢下池

白沢上池と共に、知多半島一ではないかと思える自然度と景観が保たれた、ため池です。このようなため池を各地に残せたらと思います。

ただ、気がかりなこともあります。それは、ブルーギルやブラックバスがいて、それを目的の釣り人が入り、フェンスが破られたり、ゴミも捨てられていることです。車が入れないようにするのも、手として考えられますが…。



## Bコース 「知多半島のため池・自然のいま」

- コーディネータ：富田啓介(名古屋大学大学院環境学研究科)
- ルート：美浜キャンパス→上池・七本木池→明覚池→あいち健康の森(いのちの池ほか)  
→美浜キャンパス

Bコースは、以下の3地点を回って、異なる環境の中の異なる整備状況のため池を比較していただき、ため池の現状と環境保全について考えるコースです。

### ①上池と七本木池 住宅地の中のため池の自然

満水面積が半田市内で1位と2位を占めます。住宅地にあるため池で、水質はあまり良好ではなく、堰堤や周囲には帰化植物が多くなっています。ただし、完全に自然が失われているわけではなく、周囲の一部は森林や土の岸辺が残されています。また、冬季には多数のカモ類が飛来することで知られています。七本木池の北側に広がる水辺空間が、景観や生物の保全上貴重だと評価する本実行委員のメンバーもいます。そのほか、排水口のモニュメント「空へ」や大池神社、周辺の土地開墾の際の碑文などを見ることができます。



七本木池の全景



七本木池の一部に残る森林



モニュメント



## ②明覚池 貴重種のある田園地帯のため池

東浦町の真ん中にある南北に細長いため池です。果樹園や水田の広がる田園の中にあり、圃場整備が行われた現在では周囲にはまとまった森林はありません。このため池が貴重なのは、絶滅危惧Ⅱ類に指定されているガガブタ（ミツガシワ科）が多数生育していることです。コンクリート護岸は行われていますが、水辺のヨシやガマの群落が残されていることも貴重で、トンボ類も豊富です。ただし、堰堤は管理が行き届いておらず、藪になっています。



明覚池



ガガブタの花

## ③あいち健康の森・いのちの池 公園として整備されたため池の自然

大府市の最南部にある公園内の池で、もともとその場所にあったため池をもとに造成されたもののようです。周囲には遊歩道が整備され、芝生が植えられています。また、池の中にはハスが植栽されています。周囲の公園を含め、多くの人の憩いの場になっています。明覚池と異なるのは、もとあった自然からは切り離された空間が作られている点です。



いのちの池全景



池をめぐる散歩道

## Cコース 「カワウと南吉とため池と」

- コーディネータ：河合克己（半田市文化財専門委員会委員長）
- ルート：美浜キャンパス→半田池→半田市立博物館→鵜の池→美浜キャンパス

ため池の歴史をたどり、先人の苦労や工夫を知り、次の時代へ引き継ぐためのヒントを学び取ろうと思います。

### ①半田池

近世末期、半田村海岸部に拓かれた干拓新田のために築造され、用水路は掘削せず、矢勝川を水路として使用したので、矢勝川の水の既得権を持つ流域農民との間での水利慣行が詳細に決められた模様です。

また、新美南吉の童話「おぢいさんのランプ」の舞台ともなりました。

常滑市大野と半田市亀崎を結ぶ「黒鍬街道」が池の傍らを通っているため、各地のため池造りに大きな役割を果たした「黒鍬衆」についても触れます。



## ②半田市立博物館

ため池の水を調節するための、木をくりぬいて作られた、当地方最大の「立て杵（樋）」（ダツ、タツ、スズメビルともよばれる）や、水路より高い水田に水を配水するための「龍骨車」を見て、先人の足跡に思いを寄せていただきます。



## ③鵜の池(堂前池)

国指定の天然記念物「カワウの生息地」の中心にあるため池です。

化学肥料が発明される前の江戸末期から明治期には、近隣の上野間村の農民たちは「鵜の糞」を集めて販売し莫大な収入を得て、村の経費に充てていました。その一つに村立上野間小学校があり、口さがない悪童たちは、上野間小学校を「糞立（フンリツ）鵜の糞（クソ）小学校」とよんだと伝えられています。



## Dコース 「知多半島・水とため池の来し方」

●コーディネータ：曲田浩和（日本福祉大学）

●ルート：美浜キャンパス→知多市歴史民俗博物館→佐布里池→正法院→美浜キャンパス

愛知用水の調整池としてつくられた佐布里池を中心に、水で苦しみ、水で笑い、水に親しみ、水で闘ってきた歴史をたずねるコースです。

### ①知多市歴史民俗博物館

基本的なため池の構造やため池づくりの技術者である黒鍬が説明されています。

### ②佐布里池

佐布里池は、1965年（昭和40）、愛知用水の調整池として完成しました。佐布里池は、有効貯水量500万立方メートル、満水面積62ヘクタールの巨大なため池です。

佐布里池は加世端池を基に拡張されました。多くの耕地が失われましたが、恒常的な水の給水は知多半島の人々の願いです。村の人々は村の利害を超え、知多半島の人々のために佐布里池を誕生させました。



佐布里池の堰堤



佐布里池にある信濃川の取水口

### ③水の生活館・愛知用水神社

水の生活館は、愛知用水を中心に水と生活を考える施設です。水をめぐる懐かしい道具が展示されています。愛知用水神社は、水の安全を願い、工事の犠牲者の慰霊のためにつくられました。神社の隣には、水利観音があります。



水の生活館



愛知用水神社

### ④雨宝山の寺院

水不足に苦しんだ知多半島、降水量は決して少なくありませんが、ほとんど大きな川がなく、梅雨時期には三日も雨が降らないと、空を見上げて雨の恵みを待ったといわれています。佐布里にある正法院・密厳寺・誕生寺・如意寺・浄蓮寺は「雨宝山」を山号とする雨乞いの寺院です。



雨宝山正法院

## ミニコース<フィールド学習会番外編> 「足廻間池の自然と動物」



足廻間池とは、ため池シンポジウム会場の日本福祉大学美浜キャンパス内にある小さなため池です。野球のグラウンドが隣接しているため、ボールが散乱しており、きれいなため池ではありませんが、大学キャンパス内にあることでそれなりに守られています。

シンポジウム当日（16日）には、カメなどの生き物などの観察ができるように準備を行います。足廻間池について、大内秀之さん、富田啓介さんにコメントをいただきました。

### ● 大内秀之（NPO『カエルの分校』代表）

足廻間池は、小さな谷池ですが、堤体側以外は照葉樹の森に囲まれ、自然が保たれています。今回のシンポジウムをきっかけに、大学内に足廻間池を研究・保全サークルが発足させたいという話も出ています。将来的には、大学や学生たちによる地域のため池の支援組織に育てばよいと思います。

足廻間池にはアンペライなどの水草もあり、トラフトンボの姿も確認できました。この池はキャンパス内にあり、釣り人が入らないので、周囲の森なども含め、上手に保全すれば、多数のトンボの舞う、自然豊かなため池になりそうです。冬にはカモなども入りそうですので、彼らによって浮き葉性の水草も増えそうです。足廻間池の脇にはノバラとアザミも咲いていました。

### ● 富田啓介（名古屋大学大学院環境学研究科）

「日本福祉大学美浜キャンパスの中にため池がある」と聞いて、まず思い浮かべたのは、しっかりとコンクリートで護岸され、キャンパス内の施設然とした人工的な池でし

た。しかし、実際に見学すると、その予想は大きく外れました。背後にはこんもりとした森林を抱き、水際は土のまま。下流こそグラウンドとなっていますが、堰堤も草地として維持されていました。このような生物多様性を支える素地のあるため池がキャンパス内に残されていることは、生きた教材として大変貴重であると感じました。

私は地理学出身なので、足廻間池とその周辺が現在までにどのように変化したかが気になりました。キャンパス造成のため、ため池周辺の地形や水系が現在はわかりにくくなっています。そこで、キャンパス造成前の 1978 年の空中写真を見ると、このため池は伊勢湾にそそぐ山王川の水源の一つにあたり、谷戸（谷に開けた水田）の最も奥まった場所に位置していたことがわかります。また、周囲には所々がミカン畑として切り開かれた里山の森林が広がっているのも見えます。この様子から、かつては下流の水田の貴重な水源であったこと、背後の山林がため池を潤していたこと、そして山林・ため池の水域・水田が一体となった豊かで健全な生態系が存在したであろうことが想像できます。この景観の一部が、そっくりそのままキャンパスの一部となって残されていることは、やはり貴重です。

今後、植生学の立場からは、池上流の森林・堰堤の草地それぞれについて、フロラ（植物相）と群落の調査を行い、基礎的なデータを得ることが大切だと感じます。これにより、このため池の貴重さや地域の自然環境の中での位置づけを客観的な目で明らかにすることができ、また、保護の指針も提案することができるでしょう。



1978 年（キャンパス造成前）



1988 年（キャンパス造成後）  
いずれも国土交通省の国土画像情報（カラー空中写真）より

## ため池の活動紹介

9月16日(日) 13:30~14:30

会場: 12号館3階 1232a・b・1233 教室



知多半島のため池③ 馬越池(阿久比町福住地区) 2001.12.9撮影

知多半島のため池の多くは、渡り鳥の貴重な中継地・越冬地である。中でも冬季に飛来するカモ類はよく目立つ。飛来地として、半田市の上池・七本木池等はよく知られているが、こうした無名池へもやってくることは案外知られていない。



# ため池の活動紹介

## ●ポスターおよびパネル発表

### 1) 国際ため池シンポジウム 2006 in 姫路 第1回ため池シンポジウム実行委員会

岡田真美子（兵庫県立大学・環境人間学部・環境宗教学研究室）

わたくしたちのグループは、(独)日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究事業の日本的知的資産の活用プロジェクト、兵庫県、兵庫県立大学大学院環境人間学研究科が協働して立ち上げた第1回シンポジウム実行委員会です。2006年11月10-11日姫路で、全国一のため池数をほこる兵庫県で、ため池の継承と再生について考える世界初の国際シンポジウムを企画・運営しました。スリランカと韓国のため池研究者の基調講演、ため池研究者によるパネルディスカッション、分科会、全体会を行い、ため池の多面的な機能を認識する中から、ため池の過去・現在・未来の課題が見えてきました。この第1回ため池シンポジウムの立ち上げから当日の様々までを報告します。

### 2) ボーイスカウトにおける自然教育

長岡史晃（ボーイスカウト犬山2団）

みなさんはボーイスカウトをご存じですか？ボーイスカウトは青少年の健全育成を目的とする世界中のほとんどすべての地域で行われている活動です。ボーイスカウトというとキャンプやスキーなどの野外活動、募金活動や美化活動などのボランティア活動といった様々な印象を持たれると思います。今回は、最近の子供達には疎遠になってしまっている、ため池や川を中心とした遊びや、水辺の生き物の観察、ゴミ拾いを通じた環境問題への教育など団で行った自然教育活動を紹介します。

### 3) 昔はいろいろなところで役立った ため池を考えよう

大橋一弘（ミツカングループ本社）

江戸時代、知多半島では溜池は、多く造られ、その溜池から田畑に水を潤していました。また、その溜池の築造技術を用いて「黒鋤師」となって各地へ出稼ぎに行き、地下に漏れた水が酒造りの水になったりして、意外な面でも活躍していました。

### 4) 外来魚駆除後のカイツブリの繁殖事例

吉鶴靖則（財団法人日本野鳥の会 サンクチュアリ室 豊田市自然観察の森担当）

カイツブリは池沼からの減少が顕著で、その理由に外来魚によるヒナの捕食の可能性が指摘されている。豊田市自然観察の森の上池では、近年、生息魚類のほとんどが外来魚でカイツブリは1989年を最後繁殖していなかった。2006年、上池の水を総て抜いて外来魚を駆除したが、この中にはカイツブリのヒナを捕食できると考えられる40センチ級のオオクチバスも多数含まれていた。翌2007年には18年ぶりにカイツブリが繁殖し、これまでに3回、合計10羽のヒナが確認されている。外来魚駆除以外は池や周囲の環境にほとんど変化がないことから、カイツブリの繁殖は直接的な捕食者の駆除と、池畔に立ち入る釣り人の減少等によるものと考えている。

### 5) 池干しに伴う在来種のカメ類の保護活動～加古川市寺田池のケース～

西堀智子（和亀保護の会）

2006年秋、加古川市の寺田池（14.6ha）で改修工事に伴う池干しが行われた。水が抜け切らない

池中央の泥状の部分には外来種のアカミミガメが多数観察され、石積み護岸が予定されていた池北側の自然林を流れる水路では、僅かながら在来種のクサガメが見つかった。和亀保護の会では、工事終了予定の2年後に、池と水路が在来種のカメ類の棲息環境として相応しいものとなるよう、行政・研究者と協力して、アカミミガメの排除とクサガメの保護、水路の護岸設計に関わることになった。現在までに10回の調査を行い、排除したアカミミガメは822頭、保護したクサガメは103頭。生物に優しい水路設計のために関係者と2度の話し合いを行った。

## 6) 虫いっぱいので山づくり～はじまりはため池から

日比伸子（檀原市昆虫館）

檀原市昆虫館は、高松塚やキトラ古墳等、古代ロマンの香り漂う大和の地、国の名勝・大和三山『天の香具山』の麓にあり、周りには田畑や家並みが見渡せます。古から脈々と続いてきた人里の中で、私たちは『人と昆虫・人と自然とのかかわり』をテーマに活動を展開しています。奈良県内のため池の昆虫調査に端を発し、周辺の田んぼや溝・小川・雑木林等へと調査フィールドが広がり、また調査だけでなく、実際に池を掘ったり、雑木林を再生しようとする試みへと活動の幅は広がっています。今回は、『虫いっぱいので山づくり隊』ボランティア活動や、檀原市昆虫館の教育普及活動についてご紹介します。

## 7) 犬山市のため池におけるカワバタモロコシの生活史

荒尾一樹（ため池の自然研究会）・下山淳二（岐阜市役所）

カワバタモロコシは、体長35～55mmの日本固有のコイ目コイ科魚類である。東海地方以西の本州・四国・九州の平野部のため池や河川に生息するが、ため池の埋め立てや河川改修、オオクチバスなどの外来種の侵入により生息地が減少している。そのため、環境省（2003）のレッドデータブックでは絶滅危惧IB類、愛知県（2002）では準絶滅危惧に選定され、早急な保護対策が必要とされている。しかし、保護対策に必要な生活史に関する知見が乏しいのが現状である。そこで、我々は1年間にわたって犬山市のため池で、成長や産卵などの生活史に関する基礎的な知見を集積したので、その調査結果を紹介する。

## 8) 愛知県豊田市のため池の動物の現在一特にカメ類について一

岡田夕季（名古屋大学大学院生命農学研究科）

矢部隆（愛知学泉大学コミュニティ政策学部）

織田銃一（名古屋大学大学院生命農学研究科）

1998年から2004年にかけて、愛知県豊田市とその周辺の33箇所の溜池および河川においてカメ類の分布調査および確認したその他の動物の記録を行なった。その結果、カメ以外の動物を記録した23箇所すべての調査地で外来種を確認した。カメの調査では総計461頭を確認し、在来種であるニホンイシガメが最も多く（87%）、外来種であるミシシippアカミミガメが次に多かった（8%）。本調査地では、溜池に設置された余水吐けからのカメとカエルの落下、カメによるルアーフィッシングに使用する疑似餌や釣針の誤食、および生息地周辺が開発され人が訪れやすくなったことによる外来種の放逐が、在来種の生息を脅かしていると考えられる。

## 9) 知多半島の外来動物の生息状況—特にカメ類を中心にして—

矢部隆・野村美巴（愛知学泉大学コミュニティ政策学部）

知多半島のため池では最近ミシシippアカミミガメ、ウシガエル、アメリカザリガニ、ブルーギル、オオクチバスといった外来動物が急増しています。1970年以降大量に輸入されたミシシippアカミミガメは知多半島では先端よりも大都市名古屋に近い半島の基部に多かったのですが、同じく戦後に輸入されたオオクチバスやブルーギルは、人間に運ばれたためか愛知用水が経路となったためか、半島のすみずみにまで広がっていました。戦前に輸入されたウシガエルやアメリカザリガニはすでに半島の先端までまんべんなく分布していました。本活動紹介では、知多半島におけるこれらの外来動物の定着の現状を報告し、在来生物や生態系への影響を考えます。

## 10) 名東自然倶楽部活動の紹介

堀田守（田んぼグループ代表）

「名東自然倶楽部」は、66.2haの猪高緑地に於いて、昔ながらの作業を通して、文化や景観を受け継いでいくことにより、貴重な生き物が暮らせる豊かな生態系を維持していくことを目標とし、保全活動をしています。倶楽部内のグループが行う活動の中で、雑木林やため池(大小7ヶのため池がある)などの自然環境に加え、園路、竹林、畑、水田、水路などの人工的な構造物を適切に保管理により多様性のある自然環境の保全、生物相を豊かに維持する目的で活動を行っています。そんな中、田んぼグループでは、井堀の上池・下池のため池を利用して田んぼ体験を行い、メダカや小さな魚・水生昆虫がたくさんみられ、田んぼではカエルが鳴き、そして田には稲が育つ、そんな何気ない風景の景観と、心安らぐ雰囲気を作り出し、自然環境を大切に意識できる場として後世まで残そうと活動を行っています。

## 11) うるおいのある水辺を求めて

後藤公男（大府市蜻蛉の会 [SEIREI NO KAI] 会長）

蜻蛉の会は、ため池が身近な存在になることを目的に活動して15年。まちの中心にある、生活雑排水が流入して汚れた新池が活動のフィールドです。自分たちが昔、ここで泳いだように、子どもたちが安心して遊べる池にすることが念願で「できることから始めよう！」を合言葉に、さまざまな活動をしてきました。今回は、水質浄化対策として、会の名称に因んだトンボ形の生簀に水草のホテイアオイを植栽して池の富栄養化防止に、また手づくりの水車で池水を汲み上げ、浄化材に廃棄物等を利用した浄化プラントをパネル展示します。

## 12) もっと知ろう ため池

愛知県知多農林水産事務所建設課

「あぶない！よい子はここで遊ばない」・・・ため池でよく見る看板です。本当に、よい子は遊んじゃいけないのでしょうか。ため池について、もっと知ってみませんか？

ため池は、農業用水として使うことはもちろん、他にも、生物の棲み家、人々の憩いの場、洪水の調節、緊急時の水源など、いろいろな役割を持っています。しかし、近年都市化の進展による環境悪化や、埋立てによる減少など、様々な問題が生じています。このような中で、私たちは、多くの人にとってため池のことを、もっと知ってもらうため、いろいろな活動をしています。今日は、活動の一部をパネルで紹介します。

### 13) 私たちの自然再生活動

NPO カエルの分校

埋立ての危機にあった竹村新池の自然再生と、山間に放置された田んぼを生きものの生息空間として蘇らせながら子どもたちの自然体験の場として提供している様子などを紹介。

### 14) 愛知県におけるメダカの遺伝子の差異について

NPO リリオの会

尾張弁をしゃべるメダカと三河弁をしゃべるメダカはたして知多半島のメダカは何弁をしゃべるのか？

## ●ブースその他

### 1) ため池の自然研究会

ため池は人里近くにあり、昔から人々の生活と深いかかわりを持った存在でした。農家の集落と水田、ため池、里山が一体となってつくりだす風景は、私達が心に抱くふるさとの原風景だと思います。しかし、近年都市周辺では、開発による埋め立てや汚濁が進み、我国の文化遺産ともいべきため池が危機的状態にあります。このような中で、「ため池の自然研究会」は、ため池に関心をもち、そこに生息する生物は勿論、水環境、身近な水辺としての活用など、広くため池にかかわる分野を科学的に研究調査しています。調査結果の一部をパネル展示します。

### 2) 日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト「青の革命と水のガバナンス」研究グループ

蔵治光一郎（グループ長・東京大学愛知演習林）

水を巡る諸問題の解決＝「青の革命」は、灌漑、農薬、肥料等の科学技術による「緑の革命」とは異なり、水だけでなく土地利用や生態系についての科学技術に加えて、法制度、経済、歴史、文化、人間の心のあり方を踏まえた、従来の水管理とは質的に異なる「水のガバナンス」の構築が必要です。

本研究グループは、水を巡る諸問題における住民参加等の事例研究を通じて、「青の革命」に寄与しうる問題解決型の学問の結集・再編を進め、水問題の実態と本質を把握し、問題の解決に寄与するための学問のあり方を示すと同時に、「青の革命」に関する社会提言を行い、水問題の解決に具体的に貢献していく研究グループです。

## 分科会

9月16日(日) 14:30~16:30

第1分科会(12号館3階 1231教室)

第2分科会(12号館5階 1251教室)

第3分科会(12号館4階 1241教室)

第4分科会(12号館4階 1242教室)

## 第1分科会 「水をめぐる歴史と文化」

12号館3階 1231教室

### コーディネータ

河合克己（かわい・かつみ）

（P.15 参照）

曲田浩和（まがりだ・ひろかず）

（P.18 参照）

古くから知多半島にはため池が沢山作られ、知多半島の農業を支えてきたこと、そのありさま、築造の理由、池の築造法、管理や農民の苦労等を歴史的な資料や文化的な伝承から紹介します。いわゆる知多半島のため池についての「総論」です。

続いて、築造技術の工夫や発達に伴って、当地方独自のもの造り「野鍛冶」の発生と、池の築造から体験的に会得した土木技術である「黒鍬稼ぎ」が全国へ展開し、その道具と技術が農学者大蔵永常の「農具便利論」にも紹介されるほどの発展を見せたことなどを論究します。いわゆる乏水地域の故に習熟したため池築造技術の国内各地への移出(出稼ぎ的な要素も含めて)のありさまを紹介します。

### 話題提供者

河合克己（かわい・かつみ）（P.15 参照）

曲田浩和（まがりだ・ひろかず）（P.18 参照）

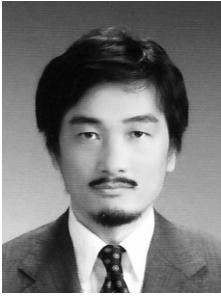
## 第2分科会 「ため池の価値と地域住民の役割」

12号館5階 1251教室

コーディネータ

大沼淳一（おおぬま・じゅんいち）

（P.15参照）



西村一彦（にしむら・かずひこ）

1966年生まれ。日本福祉大学経済学部 教授。

著書・論文：『環境経済の理論と実践－エコロジーのための意思決定－』オーム社、『市民参加型会議におけるシナリオを用いた合意形成の頑健性に関する検討』環境科学

これまでは、理論や計量ばかりやっていたのですが、これからは、知多半島を対象としたフィールドワークや社会調査も、学生とワイワイやっ  
ていこうと思っています。

ため池の持つ多面的な価値についての認識がようやく高まってきた。とりわけ、本来の築造目的であった利水機能を様々な理由で失ったため池が次々と姿を消しつつある現況に危機感を感じて、様々な分野で様々な活動が始まっている。その担い手は、市民、住民、行政、専門家など多種多様である。そうした流れがあるからこそ、今回のシンポジウムのような企画が生まれたということもできる。

しかし、多面的、多様な価値の中には相互に矛盾するものが多々ある。とりわけ、親水機能あるいは市民、地域住民の憩いの場としての価値と生物多様性を保つハビタットとしての価値との間には大きな溝がある。防災機能や利水機能、さらには住民サービスを重視した行政によるため池の改変が生物多様性を大きく損なってしまう事例も多い。外来魚を投げ込む釣り愛好者への啓発や棲み分けも進んでいない。無論、ため池を潰廃してしまう旧態依然たる動きもまだまだ強い。

こうした矛盾、くいちがいを越えて、ため池を守り、地域の宝として未来へ引き継いでゆくためには、どうすればよいのか。この分科会では、地域住民のため池に対する意識、価値評価の現況を把握するとともに、ため池の管理や修復に踏み出した市民、住民活動についての事例、地域の学校や学童の参加事例、および地方自治体と協働して進められている先進的事例報告などを集めて、目指すべき方向を探る。

## 話題提供者

西村一彦（にしむら・かずひこ）（P.38 参照）



木村泰三（きむら・たいぞう）

矢梨新池クラブメンバー・美浜町教育長

地域の方々との絆を一層深める機会と憩いの場づくり、さらに、子ども達に自然を愛する心を育みたいと願っています。



神谷明彦（かみや・あきひこ）

1959年生まれ 愛知県知多郡東浦町議会議員

ため池は地域の原風景。自然、水辺の景観、憩いの場、洪水調節などの面からも大切です。私達は、池の掃除と簡単な水質検査を行っています。市街地のゴミ捨て場と化したため池を地域の力で復活させたいと思います。

大内秀之（おおうち・ひでゆき）（P.17 参照）

大沼淳一（おおぬま・じゅんいち）（P.15 参照）



米津良純（よねづ・よしずみ）

1949年生まれ。兵庫県東播磨県民局 参事

私の時間の大半は、『いなみ野ため池ミュージアム』に費やしています。このような状態を打開する方策を模索していますが、なかなか良い手がありません。当分、ミュージアム漬けの日々を過ごすしかないようです。

## プログラム

14：30－14：35 分科会の進め方について

大沼淳一（元愛知県環境調査センター）

14：35－14：50 「ため池周辺住民のため池に関する意識調査結果から」

西村一彦（日本福祉大学）

ため池の保全・開発・利用について、どのようにすることが望ましいのであろうか。それに答えるにはまず、人々がすでに身近にあるため池に対して、どこが好きでどこが嫌いと考えているのか、ということを知る必要がある。つまり、ため池を構成要素に分解して、それぞれの要素がどれくらいの価値をもち、各ため池がそれらをどれ位ずつもっているかということを明らかにしなくてはならな



い。そのような観点からの先行研究を調査し、紹介する。

**14 : 50—15 : 00 「知多半島・美浜町における矢梨新池クリーンクラブの活動について」**

**木村泰三（矢梨新池クラブメンバー、美浜町教育長）**

愛知県一のため池王国である美浜町。半島特有の照葉樹林に囲まれた矢梨新池は、ゴミが投棄されて汚れてはてていた。地域住民が集まって毎月 1 回の清掃活動が始まり、植樹や散策道の復活なども手がけている。近くの小学校の清掃活動への参加も始まっている。

**15 : 00—15 : 15 「知多半島・東浦町におけるため池（厄松池、切池、飛山池）と里山を守るために」**

**神谷明彦（東浦町議）**

ホテイアオイが繁茂し、それが腐ってヘドロとなって蓄積するため池。繁茂した時点で除去してやれば、逆にため池の浄化につながるはず。立ち上がったボランティアグループは、ため池の継続的な水質調査と解析なども行い、確実に池を復活させている。里山とため池の一体としての保護保全も提言している。

**15 : 15—15 : 30 「ため池をよりよい形で残すために～竹村新池の保全活動から学んだこと」**

**大内秀之（NPOカエルの分校）（代理報告：大沼淳一）**

NPO「カエルの分校」は、埋め立ての危機にあった竹村新池を、自然と共生する公園として残し、その自然の再生と保全に地域住民や小学校と共に取り組んでいる。一方、放棄された棚田を多様な生物の棲む湿地として蘇らせる活動もある。これらの活動から学んだため池保全のための方策について報告する。市民への意識付け、行政との連携、残されたため池の方向付け、ため池の支援体制づくり、学童達の利用促進、釣り人への啓発と住み分け、などがキーワードとなる。

**15 : 30—16 : 00 「兵庫県・いなみ野ため池ミュージアム構想について」**

**米津良純（兵庫県東播磨県民局）**

住民参加によるため池管理の先進地域からの報告である。ため池の数 4 万数千ヶ所、日本一のため池王国・兵庫県の中にあって、東播磨地方・印南野台地は最もため池密度の高い地域である。2001 年に策定された東播磨地域ビジョンの 4 つの柱のひとつとされた「いなみ野ため池ミュージアム創設プロジェクト」は、地域の人々が主役となって、ため池の維持・管理・利活用の新しい仕組みを構築し、継承発展させていくとうたいあげている。

**16 : 00—16 : 30 討論**

## 第3分科会 「環境教育」

12号館4階 1241教室

### コーディネータ

土山ふみ（つちやま・ふみ）

（P.15 参照）

大内秀之（おおうち・ひでゆき）

（P.17 参照）

環境の危機が叫ばれる今、人が作った二次自然である里山の自然環境の劣化が、大きな問題になっている。その里山を構成する重要な要素であるため池は、その数を大きく減らし、自然環境の変貌がすすんでいる所である。ため池を保全し再生してゆくためには、ため池の現状とその果たす役割等への認識や理解を深め、多くの人々に伝えてゆくことが大切である。

ここでは、博物館や学校、地域のNPO等が、ため池を保全・再生し利用するために行っているさまざまな取り組みを紹介し、「ため池」に関する知見や「環境教育」を行う上での課題についての論議を深める。そして、今後、ため池の保全・再生のためには、どのようなことに取り組んでゆけばよいかをみんなで考えてゆきたい。

### 話題提供者



日比伸子（ひび・のぶこ）

1965年生まれ。橿原市昆虫館 資料学芸係長 学芸員。

著書・論文：『水辺環境の保全』、『里山の自然』（共著）

橿原市昆虫館は奈良県唯一の自然史系博物館であり、私は特に、虫いっぱい  
の里山づくり事業や、大台ヶ原自然再生事業昆虫調査、飛鳥川と蛍を中心とした環境保全や教育普及等に取り組んでいる。



稲山雅一（いなやま・まさかず）

1961年生まれ。日進市立西小学校 教諭。

水草水槽・ビオトープ・庭・里山等の望ましい環境造りと維持管理、登山における歩行法に興味を持っている。



**松尾由美（まつお・ゆみ）**

1967年生まれ。美浜町立河和南部小学校 教諭。

美浜町南部小学校に赴任して7年目。地域の自然を生かした総合的な学習の時間での指導を7年間にわたって行ってきた。16年・17年度は、6年の担任として、子供たちと共に新池植樹に携わった。

**大内秀之（おおうち・ひでゆき）（P.17 参照）**

**プログラム**

**14:30－15:10 「博物館から見た環境教育の課題と展望」 日比伸子（橿原市昆虫館）**

自然史系博物館としては、資料の収集・蓄積や、直接的に自然環境の保全に関わるだけではなく、自然を如何に地域に活かし、地域住民と共に歩み、次世代へと伝え繋げていくかという教育普及活動が重要である。橿原市昆虫館は大和・飛鳥の地にあり、周辺の里山里地環境を活かした環境教育や生涯学習を展開してきた。その中で見えてきた課題と今後の展望について話題提供し、ため池と人との関わりについて考えたいと思う。

**15:10－15:25 「小学校教育でため池をどう扱うか」 稲山雅一（日進市立西小学校）**

ため池の多面的な機能は、さまざまな教科・学年で格好の題材となる可能性がある。また、人口増加が著しい愛知県日進市では、ため池が埋められていく一方で、ため池を新しい姿で残そうとする動きもある。小学校教育の場でため池を扱う試みを紹介する。

**15:25－15:40 「自然と共に」 松尾由美（美浜町立河和南部小学校）**

河和南部小学校を囲む美しい自然の中でも、新池は、四季の変化に富み、安らげるような場所である。その美しさを守るために、愛情をもって活動している人々や自然から多くのことを学び、豊かな心を育ててきた子供たちの活動を紹介する。

**15:40－16:00 「ため池の自然再生の試み」 大内秀之（NPO『カエルの分校』）**

ため池を、よりよい形で後世に残すには、市民が、ため池への正しい理解と認識を持つことが不可欠である。市民の意識の高まりが、ため池管理者や行政等の理解と協力を引き出す。一方、マナーの悪い釣り人などの対策も必要である。30数年に及ぶ長野県での自然との関わりや、埋立ての危機にあったため池や、耕作放棄された棚田の自然再生活動を通じ、学び、もがいたことを報告する。

**16:00－16:30 総合討論**

## 第4分科会 「生き物の多様性」

12号館4階 1242教室

コーディネータ

矢部隆（やべ・たかし）

（P. 15 参照）

我々の先祖は地形や地勢、水脈を読み取り、自然にあまり逆らわない形で、西日本を中心に数多くのため池を造ってきた。また田植えなど農業への水の利用に合わせて水量を変化させたり、定期的に池干しや除草などの手入れをしたりして、自然でも起こりうる適度な攪乱を引き起こしてきた。その結果ため池は、人為的な環境であるにも関わらず、生物の個体数や種類数が大変多いウェットランドのビオトープとして機能していた。

ところが高度経済成長以降ため池は、埋め立てられたり、手入れを怠ったために湿生遷移が進みすぎてウェットランドでなくなったり、土手がコンクリートブロックで固められたり、余水吐けが造られたり、アカミミガメやブラックバスなどの外来生物の温床になったりして、かつての豊かな生物の多様性を失いつつある。

そこで第4分科会では、本来のため池生態系の姿を再確認し、現在のため池の危機的現状を共通の認識とし、生物多様性を維持するビオトープとしてため池をどのように再生、復元していけばよいのかをみんなで考えたい。話題提供では、まずため池の生物の多様性を微生物の世界からかいま見る。そして多様な動物を育むため池の植生の重要性について知る。最後に、ため池の生物多様性を損なう一因である外来動物についての報告を聴く。

（文責：矢部隆）

話題提供者



小鹿亨（おじか・とおる）

1958年生まれ。安城市立今池小学校 教諭。

著書：『あんじょうのホタルー安城の動物ガイドブックー』（共著）、『新編安城市史資料編自然』（共著）

淡水プランクトンの分類（特にミジンコ類）、昆虫類（チョウ・オサムシなど）を調査、研究しています。また、絶滅のおそれのある野生生物や外来生物に関わる問題や、身近な環境をあつかった総合学習や環境教育のあり方にも関心を持ち、取り組んでいます。



**飯尾俊介（いいお・しゅんすけ）**

1941年生まれ。福花園種苗KK参与。

著書：『愛知の野草』（共著）

愛知県尾張部の湿地の植生調査をしています。愛知県森林公園展示館は、ハード面では自然史博物館としての機能を持っていました。しかし、学芸員の配置がなされていませんでした。5000点を超す措葉標本が整理、保管されています。動物、昆虫標本も集められています。愛知県内に、本物の自然史博物館が出来ないか、奮闘中です。是非お力をお貸しください。

**矢部隆（やべ・たかし）（P. 15 参照）**

**プログラム**

**14:30－14:40 分科会の趣旨と進め方についての案内**

**14:40－15:00 「ため池のプランクトンと最近の話題」 小鹿亨（安城市立今池小学校）**

ため池の中には、顕微鏡で観察しないと、形態すらわからないような微小な生物が多く生息している。これらの生き物は、一般に生態的にはプランクトンと呼ばれ、ため池をはじめ淡水の生態系の基礎的な部分に大きく関係している。

プランクトンには、ミドリムシなどの原生動物、単細胞生のラン藻類、緑藻類、ケイ藻類などの植物、多細胞動物ではワムシ類、甲殻類のミジンコやケンミジンコのなかまなどが含まれる。実に多くの分類群にわたっており、種類数がきわめて多いうえに、わかりやすい図鑑類などの資料も少なく正確な種の同定は難しい。したがって、地域にどんな種類が生息しているか、十分に調査されていない場合がほとんどである。

また、これらの生き物は、体が小さくライフサイクルが短いことなどもあり、水質や食料など条件によっては、しばしば急激に増殖して大発生することもある。低地にあるため池は、出現する種類数も多く、季節による種の入れかわりもあって、1年を通してさまざまな種類が出現する。

淡水プランクトンでは、それまで分布していない種類が見つかる事例が多く報告されている。具体例として、オオビワミジンコ、スカシシカクミジンコ、タマミジンコモドキ、ヒメトゲナガワムシの記録、ビワクンショウモの分布拡大などがあげられる。それらの中には、温暖化による分布拡大や侵入、人為的な生き物の移動などが要因として考えられるものもある。

近年において、ダフィニア属のミジンコが多く観察される傾向がある。このことは、ブラックバスやブルーギルなどの大形の肉食外来魚によって、本来ミジンコ類の捕食者である小さな魚が減少したことに関係しているのかも知れない。

**15:00－15:05 休憩**

**15:05－15:25 「尾張部の新第三紀層に分布するため池の植生」 飯尾俊介（福花園種苗 KK）**

湧水湿地に水源を持つ海上の森の篠田池、森林公園の岩本池、知多半島北部の長成池、南部の岩屋の池を見てみると、明らかに、植物相の違いがある。

海上の森、森林公園、知多半島北部の池に水を供給する小さな流れや湿地周辺には、イヌノハナヒゲ類、ヘビノボラズ、トウカイコモウセンゴケ、ミミカキグサなどの食虫植物等が生えている。しかし、知多半島南部の池に流れ込む湿地にはヒメガマやミゾソバ、コナギなどのような、どこの湿地にも見られる植物しか見られない。

それらの池は、いずれも新第三紀の地層の上に作られている。しかし、前者は鮮新世の地層の上に、南知多は中新世の地盤の上に形成されている。それぞれの地層が湿地及びそれに続くため池の植物相を規定しているように思われる。

海上の森、森林公園のため池は鮮新世、瀬戸層群矢田川累層上にあり、知多半島北部は鮮新世、常滑層群布土累層上にある。何れも、東海層群の、粘土や円礫などより構成される、酸性の貧栄養土台地にある。粘土層が雨水の地下浸透を遮り、地下水位は高い。水を含んだ軟らかい粘土層は、貧栄養の湧水湿地を作り、そこは周伊勢湾要素の植物群を育む土壌となっている。

南知多の地層は中新世師崎層群の砂岩、礫岩等からなっている。雨水は地下に浸透し、地層面からしみ出して小さな流れを作る。砂岩、泥岩、礫岩上に水が流れても、植物は根付かない。風化した土壌が堆積して初めて植物は根付く。前者が貧栄養の粘土であるのに対し、後者は風化土壌であり、富栄養化した土となる。

このような、岩質、地層の違いによって、湿地及びそれに連なる池の植物相は違ってくる。

湿地から池に連続的につながる部分をエコトーンと呼ぶことがある。東海層群上の湿地を類型化すると、次のようになる。

湧水上部・・・トウカイコモウセンゴケ、ミミカキグサ、ホシクサ類群落

湧水下部・・・ヘビノボラズ、スイラン、サギソウ群落

湿地・・・ヌマガヤ、イヌノハナヒゲ群落

ため池汀線帯・・・ヒメホタルイ、タチモ、アゼナ、アゼトウガラシ群落

ため池上部（抽水植物群）・・・カンガレイ、ホタルイ、フトイ、ガマ群落

ため池部（浮葉植物）・・・カガブタ、ヒシ、ヒメコウホネ群落

ため池部（沈水植物）・・・オグラノフイサモ、クロモ、エビモ群落

今、東海層群にある湿地及びため池は急速に汚染が進み、水質悪化(富栄養化)と湿地帯の公園化が進められ、エコトーンそのものが消滅の危機に瀕しているように思われる。

**15:25－15:30 休憩**

**15:30－15:50 「外来生物の温床と化した日本のため池」 矢部隆（愛知学泉大学）**

外来生物とは、本来分布していなかった場所に人為的に持ち込まれ、野生化で繁殖している生物を指す。人間の身勝手さで運ばれたあと、原産地とは異なった環境の下で彼らなりにけなげに生きている。しかしながら外来生物は生態系を攪乱し、生物多様性を損なう一因となり、ときには人間の身体や産業に危害を及ぼすことから、地域の自然からは取り除く努力をせざるを得ない。

ため池は最近では外来生物の温床と化している。特に、ミシシippアカミミガメ、ウシガエル、オ

オクチバス、ブルーギル、アメリカザリガニの「ため池外来動物メジャー5」は各地で急増しており、在来の生物の減少に拍車をかけている。

ミシシippアカミミガメはミシシpp川の下流域が本来の分布域であるが、稚ガメがペットとして合州国から輸出され、放逐されて世界各地で野生化している。我が国も大量に輸入しており、一時期は年間100万頭近くが毎年輸入されていた。その繁殖力のおう盛さから国際自然保護連合により、外来種ワースト100にも上げられている。

我が国でも各地で野生化しているが、対策は講じられていない。東海地方のため池でも急増しており、在来種であるニホンイシガメやクサガメと食物、あるいは日光浴や産卵、越冬の場所をめぐって競合し、在来種を排除してしまい、種の置換が進行しつつあるため池もある。

オオクチバスは在来の魚や水生動物を食害することで知られている。ブルーギルもまた、小型水生動物や魚の卵や稚魚、水草を食害する。東海地方のため池でもこれらの外来魚により、在来魚が全滅に近い状態になっているところがある。ウシガエルはカエルや昆虫などの水生小動物を食害している。これら3種はいずれも北米原産で、3種とも特定外来生物に指定されている。

アメリカザリガニはウシガエルのえさとして北米から輸入された。水田のあぜに穴を空ける被害があるほか、ヤゴなどの水生昆虫を食害している。またテナガエビなど来在の甲殻類との競合関係があるかもしれない。日本では、ウシガエルのみならず、サギなどの水鳥やカメ類などの在来の動物にとって食物となっている。

ため池においては、ミシシppアカミミガメなどの競合的外来生物によって在来種が排除されてしまったり、オオクチバスやブルーギル、ウシガエルのような捕食性の外来種によって在来種が食べ尽くされてしまったり、アメリカザリガニのように食物として生態系に欠かせなくなってしまう前に、外来種を駆除しなければならない。手遅れになる前の早急な処置が望まれる。

**15:50－15:55 休憩**

**15:55－16:30 質疑応答および総合討論**

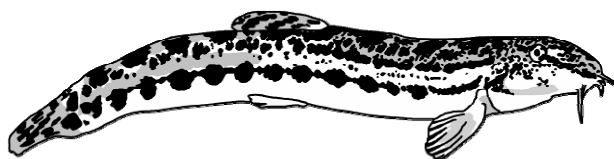
－ 第2回ため池シンポジウム in あいち 2007 実行委員会 委員名簿 －

- 浜島繁隆 (会長 ため池の自然研究会会長)
- 河合克己 (副会長・第1分科会・フィールドCコース 半田市文化財専門委員会委員長・愛知県ため池保全検討会委員)
- 岡田真美子 (第1回国際ため池シンポジウム実行委員長 兵庫県立大学大学院環境人間学研究科・「日本型地域ネットワークと地域通貨」グループ長)
- 蔵治光一郎 (事務局長・パネルディスカッション 東京大学愛知演習林・「青の革命と水のガバナンス」研究グループ長)
- 鎌田幸子 (事務局長補佐 東京大学愛知演習林・青の革命と水のガバナンス研究グループ)
- 山本勝子 (日本福祉大事務局 日本福祉大学知多半島総合研究所所長代理)
- 伊藤歌奈子 (日本福祉大事務局 日本福祉大学知多半島総合研究所)
- 近藤文男 (行政の取り組み紹介 愛知県農林水産部農林基盤担当農地計画課・愛知県ため池保全検討会事務局)
- 高部淑子 (フィールド総括 日本福祉大学知多半島総合研究所)
- 大内秀之 (第3分科会・フィールドAコース NPOカエルの分校代表・愛知県ため池保全検討会委員)
- 富田啓介 (チラシ等デザイン・フィールドBコース 名古屋大学大学院環境学研究科地理学講座・ため池の自然研究会)
- 曲田浩和 (第1分科会・フィールドDコース 日本福祉大学経済学部経済学科)
- 近藤繁生 (活動紹介 愛知医科大学医学部寄生虫学教室・ため池の自然研究会事務局)
- 大沼淳一 (第2分科会 元愛知県環境調査センター水圏部技師・愛知県ため池保全検討会委員)
- 西村一彦 (第2分科会 日本福祉大学経済学部経済学科)
- 土山ふみ (第3分科会 名古屋市環境科学研究所・ため池の自然研究会)
- 矢部隆 (第4分科会・フィールド番外 愛知学泉大学コミュニティ政策学部・日本カメ自然誌研究会)
- 小鹿亨 (第4分科会話題提供 安城市立今池小学校・ため池の自然研究会)
- 井上祥一郎 (名邦テクノ技術部・ため池の自然研究会)
- 今枝久 (リリオの会)
- 岩本廣美 (奈良教育大学)
- 内山一幸 (日本福祉大学知多半島総合研究所)
- 畔柳剛 (株式会社シーエーアイ・青の革命と水のガバナンス研究グループ)
- 桜井清 (ため池の自然研究会)
- 白井義彦 (兵庫教育大学名誉教授・愛知学院大学客員教授)
- 千頭聡 (日本福祉大学情報社会科学部生活環境学科・日本福祉大学知多半島総合研究所地域産業部長)
- 長谷川明子 (ビオトープを考える会・名古屋大学大学院生命農学研究科動物管理学的研究室)
- 益田芳樹 (川崎医科大学生物学教室・ため池の自然研究会)
- 松井邦郎 (NPO愛知生物調査会・ため池の自然研究会)
- 松本康夫 (岐阜大学応用生物科学部教授・愛知県ため池保全検討会座長)
- 間瀬千春 (半田市民)
- 村上哲生 (名古屋女子大学・ため池の自然研究会)
- 八田耕吉 (名古屋女子大学・ため池の自然研究会)



【後援】

農林水産省東海農政局、環境省中部地方環境事務所、  
愛知県、美浜町、半田市、東浦町、阿久比町、常滑市、武豊町、南知多町、  
東海市、大府市、知多市、名古屋市、瀬戸市、犬山市、尾張旭市、長久手町、  
日進市、岡崎市、刈谷市、豊田市、安城市、田原市、  
愛知県教育委員会、美浜町教育委員会、半田市教育委員会、東浦町教育委員会、  
阿久比町教育委員会、常滑市教育委員会、武豊町教育委員会、南知多町教育委員会、  
東海市教育委員会、大府市教育委員会、知多市教育委員会、長久手町教育委員会、  
日進市教育委員会、岡崎市教育委員会、刈谷市教育委員会、豊田市教育委員会、  
安城市教育委員会



水墨画（10ページ、12ページ）： 河合克己

表紙・裏表紙イラスト、本文イラスト、チラシ・ポスターイラスト： 岡田夕季

表紙・裏表紙・チラシ・ポスターデザイン・写真（6, 16, 31ページ）： 富田啓介

第2回 ため池シンポジウム in あいち プログラム

2007年9月15日 発行

発行者 第2回ため池シンポジウム実行委員会

■お問い合わせ■

事務局長 蔵治 光一郎

〒489-0031 愛知県瀬戸市五位塚町 11-44

東京大学愛知演習林

TEL : 0561-82-2371 FAX : 0561-85-2838

E-mail : kuraji@uf.a.u-tokyo.ac.jp



illustration: Yuki Okada

第2回

# ため池シンポジウム

in あいち 2007

第2回ため池シンポジウム実行委員会  
2007年9月15日 発行